

徳

上

三

吉

固く少手は読み終る

短い自分の詩と両手で捧ぐ

読み終つていよこりと頭を下げ

その頭には大きすぎる香がある

崩れる家と、母さんの一死を

五光の柔い頭でまておに受けを傷あ

六年生になつた今

厚燐香とかふあわゆる痕がある

「厚燐香が落ちてくから匂えになつた

と、いう固く君の詩か

暫くくたあ教を合館の階上を領する

厚燐以来匂えになつた苦しむ事案か

てらくしした傷痕となつて

唇の心に喰ひ込む

跛脚

の山田嬢は勤勞の雪詣居と

崩壊の園で死んだ同僚の

あしうらゝの白さをちうと思ふ

午の内職の膝の痛みをつかむ

子供の泣き声か野川夫人の耳です

カトリックの預けこ

妙によろしくなくなつた自分の子

此の同じのいれこいたおや指の傷かうか

娘を下敷きのま、焼死させた

労働者の横山は

濃い監獄面のま、突つ立つて勤め

がつと眼を据へたま、勤め

あよむちいかの風か

この時の裂けた布切れを吹りこ